

学校名	横浜市立青木小学校	執筆者名	牧野 友紀子
研究タイトル	自立した学習者の育成 — 「子ども」 が主語の学級・学習づくりを目指して —		

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。（1 ページ程度）

主に育成すべき資質/能力のキーワード	自分を客観的に捉える、対話
--------------------	---------------

子どもたちが将来社会の中で埋もれずに生き抜いていけるようにするために、今の段階でどんな力を身に付けていく必要があるのか、何を伝えていけるか、変化の激しい社会の情勢を捉える中で日々考えながら学級経営をしているところである。文部科学省が示しているように、10年後、目の前の子どもたちが大人になったとき、どのような社会に変化しているのか予測困難である。ただ、どのような時代でも自分の生き方を自分で切り拓いていく力が必要だ。その力があれば、たとえ社会が変化していても「その中で自分はどのように生きていきたいのか」を考え、世の中に柔軟に対応しながら生き抜いていくことができる。

私が小学生の頃は家庭も学校も現在ほどネット環境が整っていなかったもので、知りたいことがあると図書館に行き、図書館司書に求めている内容を説明しながら本を探した。近年は、AI の進化によって、調べたいことは端末にキーワードさえ入力すれば、労をかけずとも情報を得ることができ、関連情報まで提供してくれる。便利なものが私たちの身の回りに増えたことで、暮らしは豊かになっている。しかし、それらを「使いこなす」ことはできているのだろうか。便利なものが身の回りにあふれているからこそ、「何のために自分はそれを選ぶのか」反対に「何のためにそれを自分はそれを選ばないのか」考えながらものを選択していく力が必要であると考え。学習の中にも AI ドリルを使う場面も増えてきている。私たちは“使われるではなく使いこなす”子どもたちを育てていくことが求められている。学校生活の中で、「なんとなく。」「みんながそうしているから。」「そういうものだから。」という子どもたちの様子や発言が多くみられる。そこで、子どもたちに育てるべき資質や能力は、自分の状況を客観的に見て捉える力だと考えている。

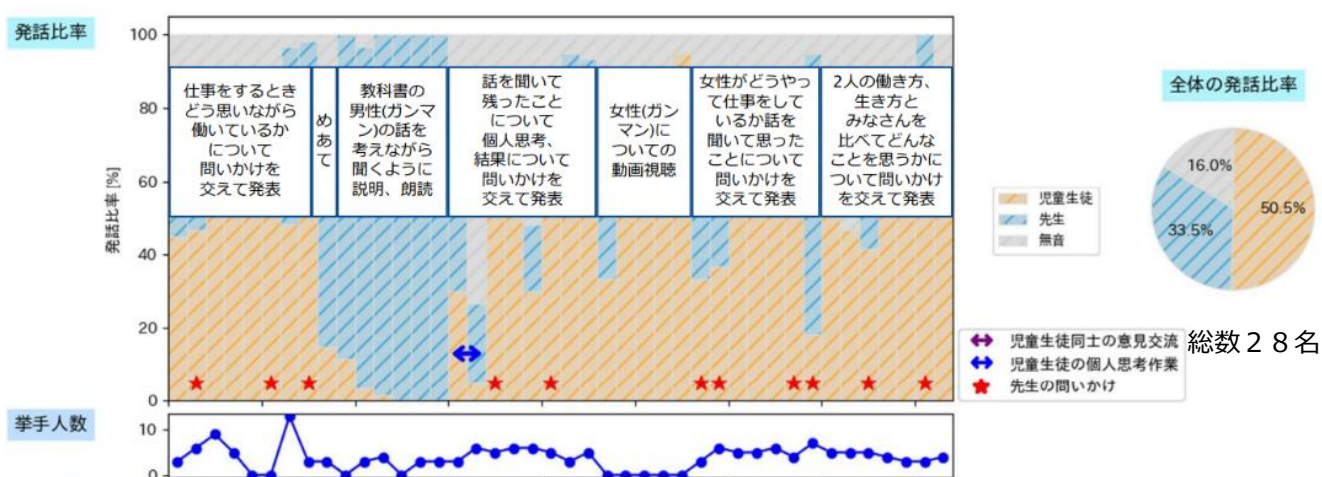
自分はどんなことが好きなのか、得意なのか、苦手と思っているのか、どんなときに困るのかなど、自分自身を客観的に分析する力を高めていくことで、学校生活や学習の中での自分の課題に気付いたり捉えたりすることができる。さらに、「自分は動画を観たほうが分かりやすいことが多いから、動画を参考にしながら考えてみよう。」というように、自分のことが分かっているからこそ自分に合った課題解決の方法を選ぶことができる。また、その過程の中で「これだと自分はうまくいかないな。では…」と柔軟に解決の道のりを調整していくことができる。その中で「自分はこうやってみたい！」という思いももっていくだろう。そうすれば、「そういうものだから。」という姿は減り、「自分はどうしたいのか」「どうなりたいか」の思いをもって、自分で学び方を選びながら主体的に学校生活を送ることができるのだと考える。乳幼児期は、主に家庭で一番身近で安心できる存在との会話の中で自分の気持ちを代弁してもらったり認めてもらったりしながら自分のことを認識していく。さらに、多面的に自分を捉えていくためには、保育・教育の中での多くの人との対話が大切である。自分のことを話す中で「自分はこう思っていたのか。」と認識したり、相手の話を聴く中で「自分もそうしてみたいな。」「自分だったらこうするな。」などと気付いたりすることができる。しかし、このような姿を引き出すためには、対話の中で「自分の思ったことを話す力」や「相手の話を聴く力」を養っていく必要がある。だからこそ多面的に自分を捉えていくために、対話する力も育てていくことも必要であると考え。

② 子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。（1～2 ページ程度）

本校は、横浜駅から徒歩圏内の位置にある。「生きる 創る 輝く」という教育理念のもと、総合的な学習の時間が創設される平成3年度以前より、継続的に生活科・総合的な学習の時間の研究をしている。子どもを「未熟な人間として教師から教育される立場」として捉えるのではなく、「子どもは、自らをより良くしていこうとする主体的存在」としてとらえ、『子どもたちに全幅の信頼を置く』ことを研究の土台としている。その考えのもと、青木フェスティバル、スポーツフェスティバルの全校活動単元があり、それらは子どもたちがどのような役割等が必要か話し合い、プロジェクト活動を発足して企画、運営を行っていく。各学年でも、行事や学習活動に応じてプロジェクト活動を行っている。また、昨年度より、横浜市教育委員会「社会情動的コンピテンシーに関する調査研究開発校」の委嘱を受け、横浜国立大学やコニカミノルタ株式会社等と連携し、学校や子どもの実態を客観的に分析し、授業改善につなげているところである。

社会情動的コンピテンシーに関する調査と横浜市学力状況調査結果から

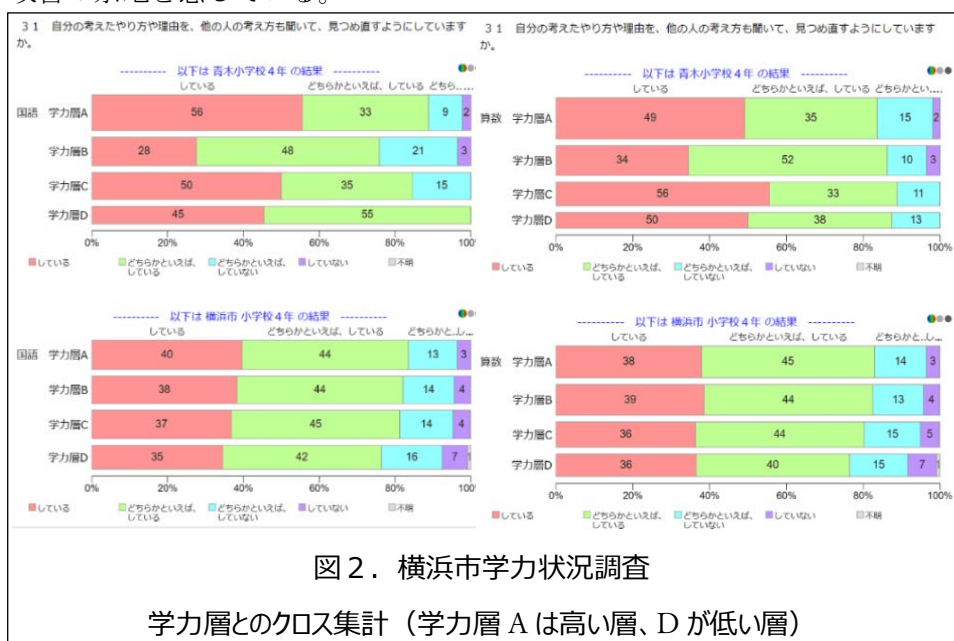
授業では、算数の計算問題のような答えが明確なことについては発言できる子どもが多い。一方、自分の考えを伝える場面では自分から挙手をしての発言はそれに比べて少なく、発言者が偏っている現状がある。



これは、社会情動的コンピテンシーに関する調査の一環で、令和6年度6月に実施した道徳の授業を撮影し分析された結果である。挙手人数に注目したとき、このグラフからは挙手して発言しようとする子どもは多くはないと読み取れる。実際には、ずっと同じ子どもが挙手していたわけではなく、場面によって挙手したりしなかったりしていたが、1時間を通して挙手をしなかった子どもがいたことも事実だ。また、この授業の中で挙手人数が増える場面に注目すると、それは教師が問いかけたことにより増えている。これ以外でも日々授業をしている中で、教師が最初に発問をしたときには挙手があるが、一通り挙手した子どもが発言してだれも挙手をしなくなったとき無音の状況が続くことがある。例えば理科「台風と天気の変化」の授業で、データをもとに調べ、台風の進路について挙手した子どもたちが話し終えたときのことである。私が黒板の前から子どもたちの様子を見てみると、子どもたちは先生がこの状況に一石を投じられるだろうと言わんばかりの眼差しで教師の方を見ている様子が見られた。その

まましばらく待っていると、挙手はしないものの子どもたちはつぶやきを始めた。しかし、各々がつぶやいているだけで、全体に対して発言しているわけではないので、話が停滞するということがあった。このグラフには子どものつぶやきは含まれておらず、純粋に挙手をしてから全体に向けて発言した子どもを発話率として捉えている。この道徳の授業でもつぶやきは多かった。しかし、つぶやいているだけで対話につながっていない現状があった。本校がこれまで研究している総合的な学習の時間では、子どもたちが意見を伝え合う中で課題を見出す姿は多くみられる。しかし教科等の授業の中では「授業は先生が進めてくれる」「先生が問題を提起して、それについて考えていく」という受け身的感覚に子どもたちがあるのだと考えられる。これらの現状から、授業の中で、話す聞くことを通して自らの考えを再認識したり構築したりすることに改善の余地を感じている。

また、令和5年度に実施した横浜市学力状況調査における「自分の考えたやり方や理由を、他の人の考え方も聞いて、見つめ直すようにしていますか」という質問に対して、「している」と回答したのは、国語と算数の学力層Bの子どもたちの割合が横浜市の平均と比較すると少ない。この結果と前述の子どもの現状から、ペアやグループ、全体での話合いで友達の考えを聞くことで自分の考えを



客観的に認識したり、友達の意見を取り入れながらよりよい方法を考えたりする経験が少ないのではないかと考えられる。この結果と授業中に挙手した子どもの発言が終わると話合いが停滞し始めることと合わせて考えると、子どもたちが「話を聞く力」に課題があるのではないだろうか。実際に授業の中で各々が自分のもっている知識や意見を出すことはできても、それが線としてつながっていかない教師としての感覚もある。

図3の熟達目標は、学級において失敗も学習の過程と捉えて粘り強く学習することが大切にされているか、遂行目標は学級において過程ではなく結果を重視することが大切にされているか問われた結果である。遂行目標の数値が低いということは、学習の過程を大切にされていると感じている子どもが多いということであり、生活科、総合的な学習の時間を研究してきた

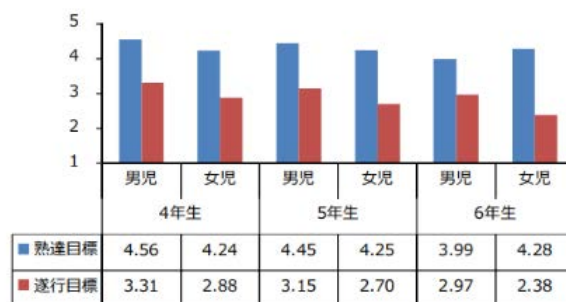


図3. 令和5年度市教委、横浜国大との連携調査より

成果と言える。熟達目標が高いということは、自分の選んだ学習の過程がたとえ失敗に向かったとしてもポジティブに捉え、モチベーションを保ちながら学習をしていけるとも捉えられる。一方、熟達目標が優勢な状態ということは、他者による評価よりも自分の感覚を大切にしているとも捉えられる。それゆえ、友達の意見を取り入れながらよりよい方法を考える経験が少ないのではないのだろうか。

③ 教育支援の方針・・・子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3 ページ程度）**一人一人の思いを大切にしたい授業**

クラスの子どもたちに「学校でどんなことをしてみたいか」ということを聞いてみた。子どもたちは「してみたいことって何だろう。」と戸惑っていた。戸惑いながら「無理だと思うけれど、全校で球技大会をやってみたいな。」「できないかもしれないけれど、自分たちで1日の時間割つくれたらいいな。」などと話していた。ほとんどの子どもが実現は難しいと考えていることに危機感をもった。子どもたちはしたいことがあっても、それを実現する方法を見出せない現状が課題だと考えた。学校は決まっていることをする場所、先生たちに教わりに来る場所、そんな感覚が子どもたちの中に根付いてしまっているようだ。そのような中では「自分はどうしたいのか」思いをもって学習する機会が少なく、受動的な学習となる。自分の課題を捉え、それを解決する方法を選び、必要に応じて調整していきながら課題解決をするプロセスを経験するのは難しいのではないだろうか。だからこそ、それを経験できるような授業に変えていかななくてはならない。

1年生の体育「鬼遊び」の学習では、「もっとみんなで楽しい鬼遊びにしたい」という強い思いから、子どもたちはアイデアを出し合いルールを作っていた。教師は解決に向かえるように時間や場を設定し、粘り強く見守った。子どもたちが課題に出合ったときに「どうしたい？」と問いかけることで、子どもから出たアイデアをもとにルール作りを行い、子どもたちの思いのつまった鬼遊びで楽しく体を動かしたり技能を身に付けたりできた。本校では、生活科や総合的な学習の時間ではこのような授業が展開されているが、その他の教科等の中ではなかなか展開できていないように感じている。

そこで、どうしたいのか子どもの思いを引き出したり、自分の課題に合った学習の進め方を考えたりできるような、自由進度学習の時間を全教科等で取り入れていく。

これまで私の学級での漢字学習は、教師が黒板の前に立ち、子どもたちに読み仮名を問い、その漢字を使った熟語を発表させ、書き順や注意点を伝えて各々がドリルで漢字練習をしていた。まさに「やらされている感」がある展開の仕方だと思う。自分の感じている課題に合った学習方法を選ぶ子どもを育てていこうと思っていたはずなのにとふと疑問に思い、子どもたちにどのような漢字の学習の仕方があるのか聞いた。すると戸惑いながらも、「語彙力を増やしたいから漢字辞典で言葉見つけをしたい」

「習ったはずなのに文の中で使えないこともあるから、学習した漢字を使って文づくりをしたい」「書いて練習すると覚えられるからノートに練習したい」「これまでのように先生と一緒に漢字を確認したい」「これまでの漢字が身に付いているのかタブレットを使って検定をしたい」という意見が出てきた。子どもに問いかけると、自分の経験や課題から学習の方法を考えることができていた。このように、子どもたちがどんな学び方をしていくかデザインする時間を設定していく。すべてを投げるのではなく、子どもに委ねる中で教師の出どころはどこか吟味していきたい。全教科等で、「どうしたい？」「どう考える？」と問いかけることを大切にする。

自分の学習状況を捉える手立て

〇書いて自己をふりかえる

授業の最後には5分程度、その1時間の中でどのような課題解決をしたのか、さらに今日の授業の中でどのようなことを考えたり気付いたりしたのかを書いてふりかえる時間を多くの学習で設定している。教師が個人の学びを見取るためでもあるが、いちばんのねらいはどのような方法が解決につながったのか、どのようなことを困難に感じたのか自分でふりかえることができるようにするためだ。年度当初にふりかえりの時間を提示すると、5年生であっても「何を書こう。」と戸惑う姿が見られた。

図4のように、抽象的な内容が多く、具体的にどのように課題解決を行ったのかふりかえる力を高めていく必要があると感じた。この力は積み重ねが必要である。回数ではなく、自分にとって気付きとなるふりかえりの時間を積み重ねていくことが大切だ。何も伝えないで書いた結果、このような内容となってしまった。

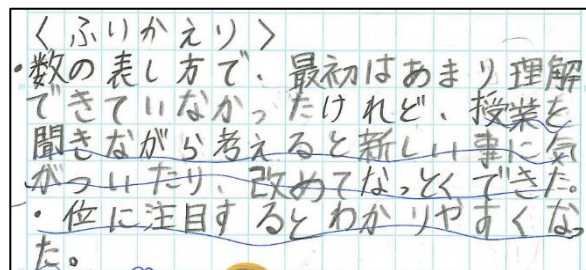


図4. 4月の算数のふりかえり

具体的であったり、ポジティブなことだけではなくネガティブなことや自分の改善点などを書いていたりする子どものふりかえりを取り上げて全体化することを積み重ねることで、学級のふりかえりの内容が変容していった。

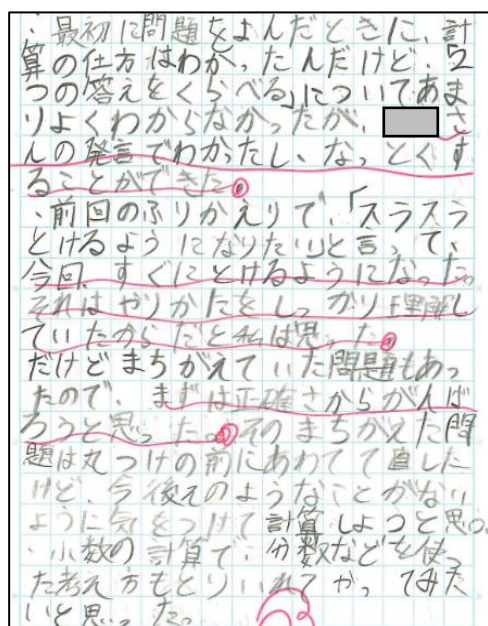


図5. 6月の算数のふりかえり

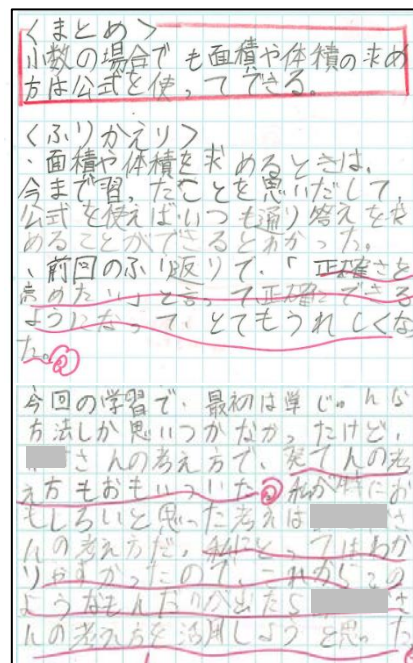


図6. 図5の次時のふりかえり

まだ具体的にふりかえる部分はあるものの、自分は何が課題で何の力を身に付けたいかまで書くようになったことを、自分の学習状況を自覚できるようになってきていると状態と捉えた。このように書くことで、自分の得意を生かし、苦手を解決して学びにつなげる手立てを引き続きうっていきたい。授業の中で褒める、価値付けて即時的にフィードバックを行うことでこのことを学び取れるように支援して

いく。また、書くとともに、それについて話すことで自分のことをさらに客観的にふりかえることもできていくだろう。

教師の勘と情報（社会情動的コンピテンシー調査）に基づいた学級経営と授業づくり

「学習の中で授業を進める力があるな」「誰とでも分け隔てなくかかわることが得意な子だな」などと、教師はこれまでの経験をもとに子どもを捉えている。この教師の勘は、子どもと毎日教室でかかわることで培われていく。社会情動的コンピテンシー調査の個人結果を見ると、この勘と数値は近く、自分の感覚に根拠をもつことができた。今年度は、この結果の「かかわりのスキル」と「配慮のスキル」に注目し、6月の宿泊体験学習の活動班を形成した。すると、かかわりのスキルの高い子どもがリーダーとなって活動を引っ張る姿が見られた。これをもっと早く用いることができたなら、より授業の中でも子どもたちが輝く場面が設定できたのではと感じたので、特に年度当初などまだ十分に子どもを見取れていない時期に、教師の見取りと合わせてこのデータを活動していけるのだと考えた。かかわりのスキルが63.3と同じ数値の子どもであっても、他のスキルの数値や得意不得意は異なる。100%数値をもとにするのではなく、教師が自分の目で見取って得た情報と掛け合わせながら教育活動の中に取り入れていく必要がある。

学年・クラス・出席番号：4年

	グリット	配慮のスキル	かかわりのスキル	社会貢献目標	社会経済目標	意味理解方略	丸暗記方略	子どもの楽しさ
得点	3.13	4.00	4.00	5.00	4.50	5.00	1.67	5.00
4年生平均	2.84	3.51	3.16	3.86	3.36	3.61	3.05	3.94
最大値	4	4	4	5	5	6	6	5
偏差値	55.6	59.4	63.3	63.7	63.0	64.9	35.9	60.1



児童の社会情動的コンピテンシー

図7. 社会情動的コンピテンシー調査個人結果の表

自分の意見や思いを発信できる雰囲気づくり

○子どもの社会的スキル横浜プログラムの活用

子どもの社会的スキル横浜プログラムとは、様々な課題に直面しながら生きている子どもたちが、問題や課題に対して効果ある対処法を選択し、自分で解決していく能力などの年齢相応の「社会的スキル」が子どもたちに十分に備わっていない背景を要因として、自分の思いを発信し、他者の思いを受け取り、互いに高め合って子どもを育成するための指導プログラムである。

○自分づくりスキル…自分の意見をもつ。自分なりの見方や感じ方をもつ。

○仲間づくりスキル…かかわり、共感、配慮、自己表現する

○集団づくりスキル…感情のコントロールや、問題や課題の解決策をみんなで考える

があり、本校はもちろん横浜市内の学校では、自分の学級の実態を把握し、月に1回高めたいスキルに応じて内容を選んで実践している。

自分のことを客観的に捉えてよりよい生き方を考えていくには、他者の目や意見も必要である。友達や教師に褒められたり意見をもらったりして気付くことも多い。「笑われるかも」「言っではいけないかもしれない」という感覚があるから子どもたちは授業の中で発言よりもつぶやきが多いのではないだろうか。「自分が思ったことを言っているのだ。」という経験を積み重ねていくことで、よいと思ったこと、気になったことなどを気軽に伝え合えるようになる。そのためには、普段から話しやすい雰囲気があることが大切であり「聞き方」への手立てが大切だ。本校は月に1回各学級でこのプ

プログラムを取り入れていくことになっているが、行事や学級の様子を鑑みてコンスタントに取り入れることで、楽しみながら聞き方について学び、学級全体の心理的安全性も確保することもできる。

この子どもの社会的スキル横浜プログラムを通して、聞き方について学んだり、自分はこういうときこうだなと感じたりする経験を積ませていきたい。

④ 実行計画と準備状況・・・「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4 ページ程度）

具体的な工夫のキーワード	子どもに委ねる学習、ふりかえり、教師の見取りとデータ、雰囲気づくり
--------------	-----------------------------------

一人一人の「こうしたい」「こうなりたい」を大切にしたい授業

実施時期：2025年4月～ 全教科等で行う

子どもは自分で学びとっていく力をもつ存在として捉え直し、全教科等で徹底的に子どもの声を聴き、決定権を子どもに預けていくようにする。「どうしたい？」「どう考える？」と子どもに問いかけ、子どもに学習を委ねた、「子ども」が主語の授業を全教科で実施する。そのために、全教科を通して、柔軟で多様な指導計画を作成していく。その中の一つとして自由進捗学習を取り入れていく。

○実践方法例

① 学習のはじめ

単元のはじめに、

- ・単元のねらいを提示
- ・子どもとこの単元を通してどんな力を身に付けていけるのかを確認
- ・時間数の提示

をして、オリエンテーションを行う。その上で子どもたちが学習計画と学習方法を自分で選んだり考えたりしていくようにする。教師は次時まで一人一人の計画や方法を把握し、それをもとにグルーピングを行う。

② 学習計画や学習方法を選ぶ・考えるための手立て

このような学習はこれまでに経験が少ないので、自分に合った学習計画を立てたり学習方法を考えたりすることは難しい子どもが多い。そこで、教師がいくつかの単元の学習計画や学習方法、ワークシートを提示する。そして、「どうしたい？」と全体に問いかけて、「本を使って調べたいから図書館で学習する時間がほしいな。」「問題文から立式するのが上手いから、問題文の問題を多く解きたいな。」「友達と一緒に確認しながら進めたい。」などという思いを対話の中から引き出す。それぞれが、自分の思いや友達の意見を参考にしながら、その場合には提示した中のどの学習の進め方を選ぶとよいか、またはそれをもとにどこを自分に合うようにアレンジしていけるか考えられるよう個別に支援していく。

③ 学習を進めていく中での支援

子どもたちは2時間目以降、自分で選択した教材(映像資料、画像、教具、ICT、本等)や場所などを活用しながら学習を進めていく。教師は子どもたちの理解を深められるようなワークシートの作成、資料・教具の精選等を行っていく。さらに子ども一人一人の学習状況を見取り、授業中に即時的に評価し

ていく。そうすることで、子どもたちは自信をもったり、よりよい方法に調整する力を付けたりしていくことができるだろう。また、教師が見取っていく中で、多くの子どもが理解が不十分な場合など、状況によっては授業のはじめの 15 分程度などに一斉指導を取り入れていく。

一人一人がそれぞれの進度で学習する中で得た知識等をつなぐことも教師の支援だ。必要感があれば、子どもたち同士で対話しながら学習していく。多くの知識等を繋ぎ合わせて理解を深められるよう、子どもたちにとって「知りたい」などと必要感を感じていることは何かを見取り、子どもたちが得たことを共有する時間を、授業のはじめに意図的に設定する。そうすることで、多面的にある言葉や事象について理解したり、互いに学習のヒントを得たりすることができるようにする。

このような自由進度学習の中で、子どもたちが主体的に学習をしていく姿を期待したい。来年度からと言わず今年度からこのような学習を取り入れ、全教科で行っていく素地をつくっていく。

自分の学習状況をふりかえる力を高める

全教科等におけるふりかえりの時間の設定 実施時期：2025年4月～

年度当初新しく出会う子どもたちの多くはふりかえりの時間に何を書いてよいか戸惑うことが多かったことから、4月に昨年度までの子どものふりかえりを資料として蓄積して引き提示する。

- ・具体的に解決方法が書いている
- ・自分が困難に感じたことなども書いている
- ・この学習を通してどのような力を身に付けていきたいか書いている

この視点で提示するふりかえりを選んでおく。また、子どもたちのふりかえりを見ていると、つまずきの共通点が見付けられる。特に算数では、それを次時の導入時に取り上げてみんなで分析し、本時の授業を展開していくこともあった。来年度以降は、タブレット端末を活用して子どもたちがお互いのふりかえりを見える状態にしておけば、自分たちでつまずきの共通点を見つけて本時の課題を立てていくこともできると考えている。また、「〇〇さんと自分の解決の仕方は似ているな。」「書いてはなくてもできると考えている。また、友達の方法はいいと私もやりやすかった。」など、友達のふりかえりを見ることを通して、自分に立ち返ることができることもねえると考える。

このようなふりかえりの力を身に付けることで、前述にもある自分の「こうしたい」「こうなりたい」をもとに選んだ学習の中で、自分の学習状況をふりかえり、自信をつけたり調整したりしながら学んでいく姿につながっていくようにする。

教師の勘と情報（社会情動的コンピテンシー調査）に基づいた学級経営と授業づくり

4月のたてわり活動編成、6月から7月の宿泊体験学習での活動班編成では、社会情動的コンピテンシー調査の「かかわりのスキル」の項目に注目して、活動をリードする力を発揮できるように抽出児を設定しグルーピングを行っていく。また、年度当初の席替えは、ペアやグループでの話合いがスムーズに行われるように、「かかわりのスキル」「配慮のスキル」の項目に注目して行う。

授業では、各教科等の単元ごとに抽出児を定め、一人一人が輝ける授業を展開できるようにする。

これまでの教師の見取りや社会情動的コンピテンシー調査の個人結果から輝かせたい力を捉え、抽出児を設定する。例えば、教師の見取りとして、積極的に挙手をして発言をする姿が少ないが、友達の話を

共感的に聴く姿がよく見られる子どもがいるとする。その子は社会情動的コンピテンシー調査の個人結果を見てみると「かかわりのスキル」の項目の数値が高い。そこで、4月の国語の「話す・聞く」の学習の中でその子どもを抽出児に設定し、意図的にその児童の聞き方を取り上げたり、モデルとして示したりしてさらにその子の力を全体の中で輝かせていけるようにする。

また、本校では、教師の見取りと社会情動的コンピテンシー調査の個人結果やY-P アセスメントのアンケートなどをもとに、総合的な学習の時間の単元の中で抽出児を設定し、図8のように指導案に記載している。支援の方法やどのような場面で力を発揮することを期待するか明記している。指導案は書かずとも、今後は各教科、各単元で行っていくようにする。

このように、抽出児を各教科で設定し、輝かせたい

(3) 小単元の「協働的に学んで高め合うための授業」

① 子どものみとり

社会情動的コンピテンシーのアンケートは右の結果の一方、YP アセスメントのアンケートでは、クラスの友達と一緒にいると楽しい、クラスが気に入っている、友達の話は最後まで聞くことができるという質問に「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。この結果からクラスの集団の一員でいることは楽しいと感じていることが分かり、自分から意見を発信したり、関りをもとうとしたりすることに自信をもてるとよいと考えた。協働的に学んで高め合う場面では、友達の意見を聞き、自分の考えを構築する場面を設け、アウトプットできるような支援を用意したい。〇〇が自分なりの考えをアウトプットすることで、友達に受け入れられる経験をし、自己有用感を高めてゆくことも狙いたい。

□□は社会情動的コンピテンシーの結果で、配慮のスキル、かかわりのスキルの値が高く見られた。友達の意見を受け止め、自分の意見に固執しすぎることなくクラスの目指すものにとってより良いのはどんなものか考えることができる。また、社会貢献目標の視点で□□は高い値が見られる。この小単元である、地域の方の学校に対する無償の支援や支えに対して感謝の気持ちを表現したいという意欲も大きくもつことが考えられる。□□ならば〇〇がどう考えているか自然と引き出し、話し合う空気づくりもできると考える。

□□がきっかけとなり、〇〇が少しでも話し合いに参加できるように授業としたい。



児童の社会情動的コンピテンシー



児童の社会情動的コンピテンシー

図8. 本校 総合的な学習の時間指導案より一部抜粋

力、その力を発揮する場面等を意図的に設定することで、「子ども」が主語の学級・授業づくりに近づくことができる。どのような場面で活躍できそうか、どのような学習をするとこの子の力がもっと輝くだろうということを教師が想定できれば、子どもたちに学習を委ねている中でも、意図的に教師がかかわったり場面を設定したりしてその力を発揮することができるだろう。今まで教師の勘で見取っていたことをデータと掛け合わせることで、より多面的に一人一人の状況を把握することができ、学習に活かしていくことができる。「子ども」が主語の学級・授業づくりを目指し、4月から学校行事や学習の中で、横浜市学力状況調査や社会情動的コンピテンシー調査、横浜プログラムのY-P アセスメントのデータなどもてるデータを最大限活用していくようにする。その中では、数値に表れていない力や伸びを教師が見逃さずに見取り、価値付けていくことを大切にしていきたい。

子どもの社会的スキル横浜プログラムを活用した自分の意見や思いを発信できる雰囲気づくり

子どもたちが安心して、自由進捗学習を進めたり学習の中で自分の考えたことを伝えたりするには学級経営も大切である。新しい学級となった4月は、授業の中で自分の考えを受け入れてもらう経験が少なく自信がない状況である。そこでこれらプログラムを実施する。

「どっちをえらぶ？」 実施時期：2025年4月初週まで

(子どもの社会的スキル横浜プログラム スタートプログラム 本編 (HP 版) (令和3年度) 参照)

ねらい ・自分の意見を肯定的に受け止めてもらえることで、安心して表現できる

隣の席がどのような子か知らないこと多い相手の場合、学習の中でペアトークの時間を設定しても、意見を伝えことに躊躇すると思われる。そこで以下の活動を実施する。

「せーの」と教師が合図を出し、2 人一斉にどちらを選ぶかワークシートに指を指し、選んだ理由をペアの友達に説明する。これまでも学級でこの活動を取り入れたことがあるが、ツールを用いることで話がしやすくなり、相手のことを少し知ることができたというふりかえりが多かった。10 分もかからない活動なので、教師が項目を変更することもできる。このプログラムは、1 回に限らず、前後の友達や席替えをしたときなどに繰り返し行っていろいろな友達と話すことを通して、教室で安心して過ごせるようにしていく。

「ナイス！アイデア！（ブレインストーミング）」 実施時期：2025 年 4 月中旬

（横浜市 HP 子ども社会的スキル横浜プログラム【三訂版】参照）

- ねらい
- ・誰のどんな意見でも肯定的に受け止め、よさに気付く
 - ・自分なりの意見を伝えるだけでなく、友達の意見もしっかり聞く

＜設定＞みなさんが乗った船が難破し、この《新聞紙》だけがここに残りました。そこに海賊が来て、宝物を要求しました。みなさんでこの《新聞紙》がどんなに便利な宝物であるか、その使い道をたくさん考えて、海賊にアピールしましょう。

この活動では、「批判しない」「どのような意見も OK」「質より量が多いことが大事」「人のまねをしてよい」という 4 つのルールがあり、上記の設定をもとにグループで協力してユニークな意見をたくさん出し合っていく。時間内に出た意見の中から最もユニークな意見を決めて、各グループで発表し合い、最後にふりかえりを行う。

これらの活動をする中で、これまでになかなか挙手をして発言する機会が少ない子どもを中心に、どんな意見であっても自分の意見を出す姿を認め、褒めていくようにする。さらにグループの中で友達が意見を言いやすいような反応を示したり、全体に発表する場で頷くなどの反応を示したりして相手の意見を受け止めようとする子どもを全体化し、よい聞き方について価値付けていく。

初回は 4 月の中旬に行い、5 月の大型連休明けや席替えをしたときなどに《お題》を変えて様々な友達とこのプログラムを経験できるようにし、このクラスで自分は受け入れられているという感覚を早い段階で感じられるようにしていく。それとともに自分の意見を話すことや友達の意見を聴く力を養っていく。

おわりに

子どもたちのもつ「こうしたい」「こうなりたい」をどれだけ授業の中で見過ごしてきてしまったのだろう。本教育計画を考える中で、これまでの授業のあり方を大きく変えていく必要があると感じた。これから子どもたちが主体的に学校生活を送っていけるよう、たくさん「こうしたい」を実現していき、「子ども」が主語の学級・学習づくりができるように子どもの声を聴きながら授業改善に励んでいきたい。